教育学　２回目　　**子供の誕生**　2022. 5. 13（金）諸岡功明

今日のポイント

１．『子供の誕生』（アリエス　１９６０）：子ども観の変化　2. 教育の不可能性：教育にできること

復習：教育＝生物学的ヒトを、よい人間に成長させる手段

＝子ども　＝個性化（自己の確立）と社会化＝教育の目的

＝①＿＿＿の側面　＝②＿＿＿の側面

この２つの目的（内容）は子どもとは何か？という子ども観の変化によって、拡大してきた。

１．『子供の誕生』：子ども観の変化　By アリエス

(1)未熟な人間（「小さな大人」）としての子ども＝(2)以前の子ども観（＝中世）

子ども＝出来損ない、無能、特定の機能が劣る人間（大人）　＝　悪　＝ない方がいい（早く終わった方がいい）

∴大人と同じ責任（能力、機能、役割、ふるまい）を求められる。Ex 大人と同じ服、仕事

→大人としての必要な能力、技能を早急に身に着ける必要性

→そのための手段としての教育の目的＿＿＿＿化＝

→教育の＿＿＿の側面が重視される

(2)子どもとしての子ども＝「子どもの発見」（ルソー『エミール』1762）以降の子ども観（＝近代）

子ども＝大人とは異なる、独自の性質、機能、能力をもつ存在＝価値がある＝そのままでよい

∴大人と別の責任（能力、機能、役割、ふるまい）を求められる。EX 子ども用の服、仕事

（＝その子どもの成長に最も適合する）

→その子どもに必要な能力、技能（可能性）を見極めながら、伸ばしてあげる必要性

⇒発達段階に応じた教育の誕生；就学前（幼児）、初等、中等、（高等、成人、生涯）

→そのための手段としての教育の目的＿＿＿＿化＝

→教育の＿＿＿の側面が重視される

＊成熟：無意図的な教育＝形成　Ex 親はなくとも子は育つ

2. 教育の不可能性：教育にできること

復習；教育の方法＝*教育の２大原理：指導と受容*

⑴指導：教育者が指定する、足りない特定の能力を特定の水準まで引き上げる。

⑵受容：本人の意思を尊重し、伸ばしたい能力を伸ばす手伝いをする。

∴この２つのやり方を目的や対象などに合わせて使い分けながら、結果的によい人間（大人）に成長させる手段が教育。

（＝個性・能力　＝発達段階、どのくらい子どもか）

⑴問題点

①何が目的で、それをどの時点で誰が何を基準に判断するかがわからないこと。

・目的があやふや：「よい」人間ってどんな人間？どうなったら成長？

・時期があやふや：いつ成長したら成功？明日？20年後？成人したとき？死ぬとき？

・メルクマール（基準）があやふや？：本人が判断？周りが判断？

②自主性（強制＝干渉）をどこまで認めるのか

＝指導と受容の使い分けは何を基準にして行うのか。

強制されることと、自発的であることは両立するのか＝「自発的従属」（ルソー『エミール』）

⑵教育の不可能性

⑴の①と②より、正解はないのかという疑問が生まれる。

∴正解はない

（＝いつでも、どこでも、誰にでも、何にでも適用できる普遍的なやり方）

→☆被教育者にとって何が成長か問い続けるしかない。

⑶教育にできること

→☆問い続けるための前提を確保する。

＝健康と情報　⇒（保護）養育機能

アンケート　今日の講義の内容をきいて、以下のような場合にあなたはどのように教育しますか。

あなたの息子が小学校１年生のとき、「海賊王になりたい。どうしたらいいか。」と聞いてきた。

クラス、出席番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

参考文献

山崎英則、徳本達夫編『西洋教育史』ミネルヴァ書房、1999 年。

石堂常世訳 O. ルブール『教育は何のために －教育哲学入門』：勁草書房、1984 年。